

先君子、諱は晋、字は安貞。後、邦君の諱を避けて貞を改め鼎に作る。姓は三浦、其の先は相州三浦の人なり。正治中三浦某有り。某は兄弟三人、地を豊後の國東郡に避け、薙髮して法道・法行・法念と曰ふ。法道には後無く、法念は小箇倉に居り、清原氏を稱す。法行は丸小野に居り、因つて焉を氏とす。爾來世次詳かならず。後、丸小野大和といふもの有り、菟狹に戦死すと云ふ。又、丸小野將監なる者有り、始めて富永村に移る。其の子兵部、諱は某、十郎義秀を生む。義秀、彦兵衛を生む。諱は某、大友氏時に里正と爲り、十二邑を統正す。彦兵衛、孫左衛門を生む。諱は某、繼いで里正と爲る。丸小野氏を棄て三浦に復す。孫左衛門の弟清兵衛義清は君に於て曾祖たり。義清、秋吉氏を娶り、與四郎義房を生む。義房は晩節薙髮して泉石翁散山と號し、醫を業とす。亦、秋吉氏を娶りて考を生む。諱は義一、字は快順、野梅堂虎角と號す。妣は矢野氏。享保八年癸卯秋八月二日、先君子富永村に生る。幼にして穎敏、甫めて八歳、家に近江八景の圖の屏風を藏す。君、夜雨の圖を指し、其の父に問うて曰く、是れ何の圖ぞと。父曰く、炬火を點じ襪はきを着く、其の夜にして雨あるを知るなりと。君曰く、目の寓する所、景と曰ふ、暗黒の中、豈に馳望すべけんや。之を情に屬せしむれば則ち可、之を景に屬せしむれば則ち不可と。人、之を奇とす。既にして學に志す。寒郷、師友無く、且つ家貧しく書を買ふを得ず、稗官雜史、得るに随つて之を讀む。家を距つること里許、一利有り、字彙を藏す。難字に遇ふ毎に之を記し、積つて數十字に至れば、就いて之を檢すること一月に數次なり。稍と詩を屬るに及ぶ。家に唯周伯

翊氏の三體詩一部を藏すのみ。因つて之を讀み、造語數千言。戊午の春、君年十六、始めて藩に造り、綾部有終先生に謁す。先生は藩の監部なり。吾が先君龍溪公、待するに文學を以てす。嘗て業を望鳩巢に受け、旁ら伊藤東涯・服南郭に學ぶ。君因つて與に其の説明を聞くを得たり。明年己未、君年十七、豊前中津藩の文學藤田貞一先生、君を召す。是に於て中津に遊ぶ。先生其の才を愛し、其の職を紹介がしめんと欲す。父母其の一子たるを以て許さず。幾はくも無くして家に還る。才藻日に進む。然り而して童どう大いに疑を天地造化に抱き、之を思へども得ず、數々寢食を廢するに至る。年二十餘、稍と天學の書を讀み、仰觀俯察、自ら其の器を製し、其の象を模し、以て運轉の大意を知る。大意知るべしと雖も、其の疑ふ所に非ず。年三十、始めて天地に條理有るを知る。其の立意に云ふ、天地は氣物なり、氣は即ち一氣、物は即ち大物、大物の外に一氣無し、一氣の外に大物無し。其の探る所に從つて其の物を得。故に、陰陽を探つて一二を得、氣物を探つて天地を得。天地に没露の境有り、没露の境を探り盡して天地を知る。陰陽に天神の境有り、天神の境を探り盡して陰陽を知る。陰陽を知らざれば天地を知ること能はず、天地を知らざれば陰陽を知ること能はざるなり。地は不可破の中を占め、天は不可窮の外を占む。各々其の玄界に至つて止む。夫れ地、半面は晝、半面は夜、半面は表、半面は裏、半面は萬なり。洪洪たる天地、往いて其の跡を反せざる莫し。故に條貫理析の道有らざる所無しと。是に於て筆研に従ひ、玄語十餘萬言を草す。片言隻句も古人の様に依らず。自ら言ふ、我れ豈に古人を忌まんや。古人未だ條理